

富山市とガラスの出逢い そしてガラス美術館へ。

富 山市は、これまで、新時代の教育と芸術文化、産業の振興を目指し、ガラスの街づくりを市の施策の柱のひとつとして位置づけ、「ガラスの街とやま」として様々な取り組みを行ってきました。

そもそもの発端は、300年以上の伝統を受け継ぐ富山の売薬に由来します。明治・大正期には、ガラスの薬瓶の製造が盛んに行われており、戦前は富山駅周辺を中心に溶解炉をもつガラス工場が10社以上あったといわれています。このように、多くのガラス職人が存在していた富山の歴史を踏まえ、ガラスの将来性や市民との親和性に着目し、昭和60年の「市民大学ガラス工芸コース」の開講を皮切りに、「ガラスの街とやま」への取り組みがスタートしました。

そして、**学びの場**である「富山ガラス造形研究所」、**制作の場**である「富山ガラス工房」の施設整備など、約30年間にわたり取り組んできたガラスの街づくりの集大成として、平成27年8月22日(土)に**鑑賞の場**である富山市ガラス美術館を開館しました。



昭和の初期から中頃にかけて製造された薬瓶

本

美術館並びに富山市立図書館新本館などが入居する複合施設「TOYAMAキラリ」は、世界的な建築家の隈研吾氏が設計を手掛け、外観は、御影石、ガラス、アルミの異なる素材を組み合わせ、表情豊かな立山連峰を彷彿とさせるデザインで、内部は富山県産材のルーバー(羽板)を活用した温もりのある開放的な空間となっています。また、市の中心市街地に位置することから、文化芸術の拠点としてだけでなく、まちなかの新たな魅力創出の役割も期待されています。

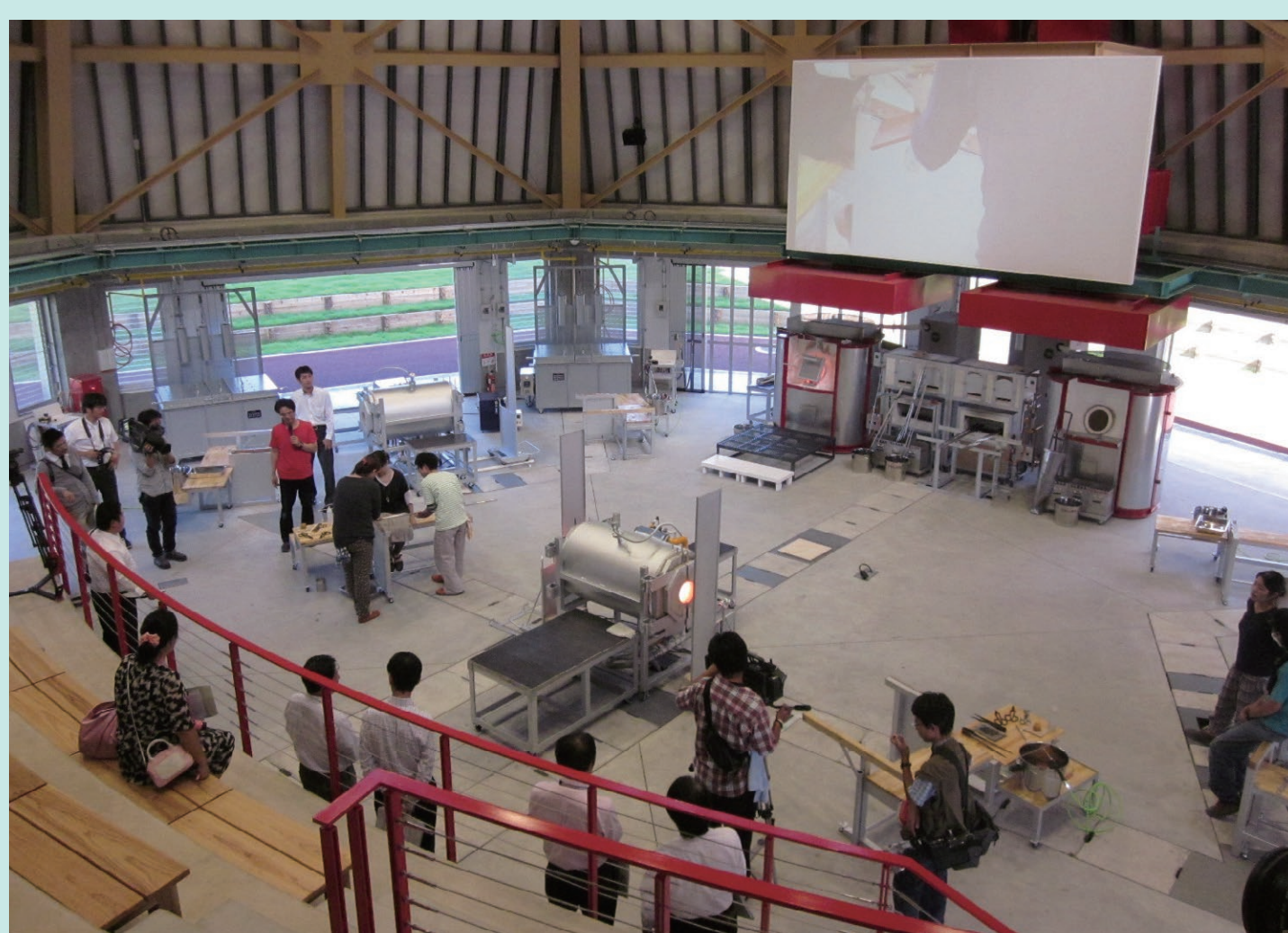
本美術館の6階「ガラス・アート・ガーデン」では、現代ガラス美術の第一人者デイル・チフリー氏の工房が制作するインスタレーション(空間芸術)作品を展示しており、本美術館のシンボルとなっています。

学びの場



富山ガラス造形研究所

制作の場



富山ガラス工房

鑑賞の場



富山市ガラス美術館